

2017年3月12日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉師

聖書：マルコ 5:14-20

タイトル：『主がどんなにあわれんでくださったか』

---

子どもというのは、いわゆる「小さな幸せ」を見つけるのが得意です。

日常のちょっとしたことでも、とっても喜んで親や周りを楽しませてくれます。ある人は裏庭の芝生にタンポポが咲いていると、とってもがっかりするのですが、子供は『綺麗な黄色いお花を摘んできたよ。』と持ってきます。また男の子は蟻地獄の巣を見つけただけで、喜んでずっと遊んでいられます。また豪華なフルコースよりも、飴玉一つ、チョコレートひとかけで、何よりの御馳走みたいに喜びます。

しかし私達大人はいつの間にか、こうした小さな幸せを純粹に喜んだり、あるいは見つけたりすることがだんだん鈍くなっているように思います。

ですから、子ども達から「純粹さ」というものを学ぶことは、本当に大切なことだと改めて思われます。

さて、本日の箇所にもこの「純粹さ」を忘れた者たちが出てきます。

14 v 「豚を飼っていた者たちは逃げ出して、町や村々でこの事を告げ知らせた。人々は何事が起こったのかと見にやって来た。」

豚を飼っていた者達は、たった今、自分たちの目の前で起こった約 2000 匹の豚が突然、険しい崖を駆け降りて湖になだれ込み溺れてしまった出来事に、驚きと恐れがあったのは容易に想像できることです。逃げ出しただけではなく、人々に知らせたというのは、やはり動揺したからでしょう。

それだけこの出来事は、彼らにとって衝撃的だったことが分かります。言わずにはいられなかったのです。

確かに、改めて 2000 匹の豚ということを見ると本当に大群です。

教会の会堂には入りきらないでしょう。ちいさなスタジアムなんかがいっぱいになるような数です。

それが一気に湖へなだれ込んだわけですから、それはやはり驚いたと思いますし、と同時に、自分たちの知らない何か特別な力が働いたことを感じて、恐れを抱いたでしょう。

さらに 15-16 節ではこの様にあります。

「そして、イエスのところに来て、悪霊につかれていた人、すなわちレギオンを宿していた人が、着物を着て、正気に返ってすわっているのを見て、恐ろしくなった。

見ていた人たちが、悪霊につかれていた人に起こったことや、豚のことを、つぶさに彼らに話して聞かせた。」とあります。

今度は、豚飼いたちが話したことを聞いた町の人々が、実際に現場へとやってきて、その事実を目の当たりにしました。

そしてあのレギオンという悪霊を宿していた男が正気に返っていることに、何よりも驚いたはずですが。

なぜなら 3, 4 節にあったように、彼らは以前、この男に足かせを付けたたり、また鎖につないだりしても決して押さえておくことが出来ない者である！ということ町の人々は、誰よりも知っていたからです。

逆を言えば、このレギオンを宿していた男というのは、町の全ての人に知られている、ある意味では超有名人であったわけです。彼を見れば、誰もが「あ！あの男だ!!」と分かったのです。

ですから、町の人々が、この男を見て、正気に返っている、しかもきちんと服を着ている。というのを見た時に、本当に驚くべき何か起きたんだ!と、誰もが感じていたのではないのでしょうか。

16節の最後には、「つぶさに話して聞かせた」とあります。

これは、それだけ人々がこの出来事に関心を持ち、『いったいどうやって? 誰が? どんなことをして? どうすればあの男をこんな風に正気に戻すことができるのか?』・・・などと、驚き、疑問に思い、そして恐れをもって、この現場の中に居たということの現れです。

そして、この驚くべき出来事は、目の前に見えている「イエス様」によったことである!と、彼らは知りました。

本来なら、あんなに大変だったこの悪霊につかれている男が、正気に返ったわけですから、町の人々は皆が、イエス様に心からの感謝を表し、そして神様を褒め称えて、イエス様一行を喜んで迎えるはずでした。しかし、彼らはそうではありませんでした。

彼らは、イエス様たちに、ここから立ち去るように、願ったのです。

17 v 「すると、彼らはイエスに、この地方から離れてくださるよう願った。」

さて、彼らはなぜ、イエス様に「この地方から離れてください」と願ったのでしょうか。

それは、彼らがこの悪霊に取りつかれていた男に起こった感謝すべき、そして目を留めるべき神の御業を純粹に受け止めることよりも、自分たちでは理解することができない霊的なことへの恐れが、彼らを支配したからだと言えます。またこの地方における産業である豚を2000匹も失ったという経済的な損失にも、あるいは目を留めたかもしれません。

つまり、まさに今、目の前でなされた神の御業と、そして目の前に居る救い主である御子イエス様に目を留めるよりも、自分たちの価値観の中に、イエス様を見ていながら、彼らは舞い戻って行ったのです。奇しくも、聖書には、このような言葉があります。

Ⅱペテ 2:22 彼らに起こったことは、「犬は自分の吐いた物に戻る」とか、「豚は身を洗って、またどろの中にころがる」とかいう、ことわざどおりです。

人々の行動はまさに、豚の行動と同じです。イエス様が御業を見せて霊的に盲目的な汚れを洗って神を見えるようにしてくださったのに、彼らはまた神を無視する汚れの価値観の中に戻ったのです。

そして、彼らが飼っていたのもまさに豚でありました。

神様は、私たちに日々御自身の素晴らしい御業を見せてくださっています。そして体験させてくださっています。

しかし、私たちは、その素晴らしい御業に気付くことも、目を留めることもできない、純粹さを失っていることがあります。

そして、物事を自分の価値観の中で何とか処理しようと、イエス様をも排除してしまうことがあるのではないのでしょうか。(「豚は身を洗って、またどろの中にころがる」ように)

その時におこる悲劇が、18に記されていることです。

18 v 「イエスが舟に乗ろうとされ」・・・た。と、つまり、私達の救い主はそこから去ってしまわれる! ということです。主が去っていくということが、どれほど大きな損失であるのか!!、彼らはそれがわからなかったのです。

ゆえに、私たちも日々、霊的に鈍感なものではなく、神の栄光を待ち望み、たとえ小さなことでも純粹に

喜べる信仰をいつも持ちたいと願わされます。

さて、この出来事の中で、たった一人だけ神様の素晴らしさに目を留めることが出来た者が、レギオンという悪霊を追い出された男でした。

彼は、『このイエス様こそは、まことの救い主である！』ということをも身をもって体験し、心の底から知りました。

それゆえ彼は、「イエス様にお供したい！」と、願ったのです。

しかしイエス様は、

19 v 「しかし、お許しにならないで、彼にこう言われた。「あなたの家、あなたの家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい。」と告げられました。そして彼は、

20 v 「そこで、彼は立ち去り、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、デカポリスの地方で言い広め始めた。人々はみな驚いた。」

と、その地方でイエス様のことを伝えたのです。

イエス様はここで、彼に二つのことを示してくださいました。

①イエスにお供できるのは、自分で選ぶことではない。ということです。どんなに自分の感情が高ぶり、献身の思いになったとしても、イエス様がついて来なさい。と呼んで下さらなければ、私たちはお供することはできない。ということです。つまり、これが「召命」ということです。

私の知り合いに田中正雄という牧師がいました。

この田中先生は既に召されたのですが、彼は若いころ、ある工場で働いていました。非常に熱心で、正義感も強く、まじめに働く模範生でした。ですから、工場長にも気に入られ、工場の仕事をたくさん任せられるようにもなりました。あるとき、友人から教会の伝道集会に誘われて、はじめは嫌な思いがしたそうですが、集会に出てみることにしたそうです。すると心に渴きがあったのか、神様のことがすぐにわかったそうです。そして、彼はその日以来、教会に熱心に集うようになり、聖書もたくさん読んで、ゆくゆくは牧師になりたい！と、思うようになったそうです。それで彼はついに思い立って、工場長に『自分は牧師になりたいので、仕事を辞めます。』と話して、教会の牧師のところに来たそうです。

けれども牧師は、『まさおくん、神様があなたに本当に、あなたに今すぐ牧師になるようにいったんですか？』と質問したそうです。

そしたら正雄くんは、『いいえ、神様の声は聞いていません。自分でそう思いました。』と返事をし、自分の感情で物事判断し、仕事まで辞めて来たことを話したそうです。それを聞いた牧師は、『まさおくん、自分の思いではなく、神様の声に従うんですよ。それがクリスチャンですよ。』と話してくださいました。

それで、牧師は正雄君と一緒に工場に行き、仕事辞めたいと言ったことを取り下げただけかどうか、工場長のところに行って、話したそうです。

そしたら工場長は、喜んでまた彼を受け入れてくださった。ということでした。

そして、それから数年後に、彼ははいよいよ牧師となるための「召命」の確信をいただき、ついに牧師になり実の素晴らしい働きをしました。私たちは、自分の思いではなく、神様に聞くということが大切です。

そして、神様が願っておられるものは何か。ということに従うのです。

そのためには日々イエス様の声を聞き分けなければなりません。つまり聖書の御言葉をよく読むことです。そして、いつもお祈りすることです。また正雄君が牧師に教えられたように、クリスチャンの交わりの中に入ることです。こうした色んな事を通して、神様は日々御自身の御心を示してくださり、召命というものの確信に迫るのです。

この時、悪霊を追い出された男は、実際にイエス様から、お供してはいけないと言われたわけですから、それを受け止めるしかなかったわけです。まさに、主の言葉に従ったのです。

②イエス様は彼が一番用いられ場所を知っている。ということです。

適材適所という言葉がありますが、難しい言葉で言えば、「配剤」という言葉でもあります。

イエス様は、彼に家族がいることを知っていました。一体誰が教えたのでしょうか？また適当に憶測でいったのでしょうか？そうではありません。彼の苦しみをもガリラヤ湖の向こうから知っていたイエス様は、彼のすべてを既にご存知でした。

そして、この男は、この地方で彼を知らない町の人々はいなかったほど、彼は超有名人でした。ですから、この彼が、この地方でイエス様がしてくださった御業を告げ知らせることは、他の誰よりも確かな証として証明することができたのです。

イエス様は、そのことを彼よりも知っていたのです。だからこそ、この彼に！この地方の宣教を託したのです。

私たちも、この私でなければできない領域というものが、みんな一人一人それぞれあります。

このことを私たちがもっと自覚することが出来れば、今、自分がその場所に立てられ、置かれているということの中に、神の恵みの配剤があること、そして主は「あなたにどんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい」という神の救いの恵みを、力強く証していくことが出来るのではないのでしょうか。そしてそれは、悪霊を追い出された男のように、とても自分の内に抑えておくことが出来ない圧倒的な恵みを知らせることが出来る喜びです。この悪霊を追い出された男は、まさに溢れ出る感謝をもってこの地方に言い広めたのです。

神様は、今日も配剤という御業を通して、私たちをそれぞれの場所に置き、「主があなたにどんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい」と、神の恵みを知らせることを、私たちを通して願っておられるのではないのでしょうか。

純粋に、主の救いの恵みに溢れるほど感謝し、また、自分で自分の居ることや場所を決めないようにし、素直に神の声に従う者でありたいと思います。そして万が一にも、神の恵みを自分の価値観の中で処理をして、無にすることのないようにと、純粋な信仰を持ち続けられるようにと願わされます。

「主があなたにどんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい」この恵みに感謝します。アーメン